



| | |
|--------------|---|
| Title | 巻頭言 : 第12号の発刊に寄せて |
| Author(s) | 真嶋, 潤子 |
| Citation | 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2016, 12, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/62211 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巻頭言 第12号の発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第12号をお届けします。2015年度のMHB研究会は、研究会の5番目の柱である「複数言語育成を目指した各種言語教育 (日本の英語教育を含む)」をとりあげ、中でも各種言語教育におけるトランス・ランゲージングに焦点をおいて活動を行ってきました。

3月にはお茶の水女子大学で、オフィリア・ガルシア博士をお招きし、トランス・ランゲージングの概念を紹介していただきました。また、その後このテーマでの研究の中間報告会を行い、ガルシア博士のご助言とコメントをいただきました。8月の研究大会は立命館大学で開催し、例年通り、MHB研究会が研究分野とする広い分野での意見交流をおこないつつ、トランス・ランゲージングについては、パネルディスカッションと、バトラー後藤裕子博士による指定討論を受けて議論を深めました。今号の『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』は、こうした活動の成果を反映し、この大会テーマであった「すべての言語資源を活用したマルチリンガル教育をめざして」を特集しています。

本紀要には、まず、パネルディスカッションのスピーカーであった3組計3本の論文を招待論文として掲載しています。加納なおみ氏の「トランス・ランゲージングを考える—多言語使用の実態に根差した教授法の確立のために—」は、バイリンガル教育関連の海外の学会では昨今頻繁に語られているものの、まだ日本には紹介されることがなかったトランス・ランゲージングという概念を初めて日本語で紹介し、その課題や批判までまとめた貴重な論文です。ぜひ最初にお読みください。その次の清田淳子氏他による『立命館キャンパスアジア・プログラム』に参加した日中韓3カ国学生の3言語能力と使用状況」および、湯川笑子氏による *Use of the First Language in an Undergraduate English-Medium Seminar Class: An EMI Case in a Japanese Context* は、日本の大学教育において、アジアの3言語で学ぶケースと、英語を媒介として学ぶケースをそれぞれ対象とし、トランス・ランゲージングの視点から学びの言語状況をとらえた論文です。言語の組み合わせ、研究方法も異なる研究を通してトランス・ランゲージングがどのようにとらえられているかをぜひご覧ください。

一般投稿論文の中では、本号には、研究ノートが1件採用されました。加納なおみ氏の「トランス・ランゲージングと概念構築—その関係と役割を考える—」

です。これも特集テーマにそった研究で、日本語を学ぶ留学生のケース・スタディーとなっています。

巻末には、例年通り、活動報告、SIG（部会）情報、入会規定、紀要第13号への投稿規定などの情報も記載しております。MHB ウェブページ情報と合わせてご利用ください。紀要12号の発刊に際し、ご投稿くださった方、査読、編集に多大な労力をささげてくださった方、その他関係者の皆様に感謝いたします。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会事務局長

真嶋 潤子

2016年3月